

令和6年度宮崎県農政水産部試験研究評価検討委員会（農産委員会）議事概要

宮崎県では、本県農畜水産業の更なる振興のため「宮崎県農畜水産業試験研究推進構想」に基づき「高度な革新的技術で、生産現場の期待に応える」研究開発等に取り組んでいます。

宮崎県農政水産部試験研究評価検討委員会では、本県農水産業の持続的な発展に貢献できる高度な技術開発を効率的に行うため、各試験場の研究計画及び研究成果等について、有識者等による多角的かつ客観的な評価や意見をいただくことを目的として毎年開催しています。

令和6年10月21日に開催した宮崎県農政水産部試験研究評価検討委員会の議事概要については、以下のとおりです。

1 委員（農産委員会：対象とする分野は、総合農業試験場の試験研究）

押川委員、下永委員、竹下委員、田村委員、長田委員、満平委員
（欠席 佐藤委員、吉元委員）

2 議事（詳細は別紙）

(1) 継続課題について

評価を受けるものではないため、事務局からの報告のみが行われた。

(2) 終了課題について

終了課題の評価は事務局案どおりで承認された。

A評価（ねらいどおり） 9

B評価（継続により成果得られる） 4

C評価（ねらいどおりの成果は得られず） 1

－（評価対象外（国等外部資金）） 6

(3) 令和7年度新規課題について

全20課題について原案のとおり進めることに同意

(4) その他報告

普及技術カード、開発した技術の知的財産化の検討状況並びに競争的資金等研究課題及び受託研究の取組状況について報告が行われた。

(別紙)

宮崎県農政水産部試験研究評価検討委員会（農産委員会）議事録

(1) 継続課題について

「次世代型ピーマン農業経営のための緑ピーマン・台木品種の育成」

□ 竹下委員

接種用の菌が死滅したとのことだがジーンバンクの標準菌を利用可能か。

■ 生物工学部 大田部長

生物環境部が保有する菌株を分譲してもらい、再度試験を実施中である。

「中山間地域における種苗安定供給を含めた野菜花き産地育成・拡大技術確立」

□ 竹下委員

斑点細菌病対策はないのか。

■ 野菜部 黒木部長

風通しを良くするための整枝方法を検討中である。

「ピーマン台木を加害するネコブセンチュウの同定とネコブセンチュウ抵抗性 F1 台木の育成」

「次世代型ピーマン農業経営のための緑ピーマン・台木品種の育成」

□ 田村委員

他県での知見の有無と他県と連携した研究の可能性について教えて欲しい。

■ 生物工学部 大田部長

黒枯れ病抵抗性については他県での知見はないが、センチュウ抵抗性台木については、過去に共同研究していた茨城県、高知県、鹿児島県と情報交換をしながら研究に取り組んでいる。

(2) 終了課題について

「宮崎特産柑橘の次代に対応した栽培技術開発」

□ 満平委員

夢丸の結果率は目標達成しているが、数値として低いのではないかと。早期の実用化に向けた取組は何かあるか。

■ 亜熱帯作物支場 山口支場長

ネイハキンカンに比べると低い。収量2.5 tを目標として設定し、12%～13%の結果率を設定。あとは肥大化する技術の開発が必要。今後は更なる着果率向上及び肥大化の技術を進めていくべきと考えており、現時点でやみくもに普及するものではないと考える。

「大規模経営の経営発展に向けた稲作技術の開発」

□ 田村委員

現場では食味コンバインなどデータを活用し切れていない。田植え機も中山間（木陰）ではGPSが拾えずに使いにくい。また、費用対効果の試算が現場に当てはまるかと感じる。導入は条件次第というところがあり、今後新しい機械が出てくると思うが、現場には厳しい条件があることを念頭に研究してほしい。

■ 作物部 荒砂部長

GPSの利用は改善されてはいるが、電波を拾いにくい時間帯もある。中山間の不形成

な水田での活用など今後の技術改善に期待する。また、大区画での活用や大規模経営体での活用が進んでいくことを考えている。

□ 田村委員

長期中干しの判断どうするのか。中干し期の降雨率は。

長期中干しの水系での評価の方法や現場の対応について、土壤水分計の設置といったことがJクレジットには出てくる。中干しを長期に実施したことの判断や中干し中の降雨の影響も検討が必要と考える。

■ 作物部 荒砂部長

Jクレジットの取組については、関係機関で検討をしており、今後具体的に詰めていくことになる。中干し期間は降雨の影響があるので、複数年実施している。普通期は2カ年で実施しているが、早期は本年度も継続実施中である。

「おいしさの「見える化」に向けた技術開発」

□ 竹下委員

食味寄与成分は測定時期によって異なるのではないか。

■ 生産流通部 溝口部長

今回は収穫後、出荷時点における測定により評価しており、収穫後、追熟する期間に食味寄与成分の構成が変わる可能性はある。また、今回の試験は同一ハウスの園地を3カ年評価したものであるが、同一園地内でも環境が変わるので、場所毎に区分して評価を実施。

□ 竹下委員

農家の反応や波及効果は。

■ 生産流通部 溝口部長

試験は場の農家から、妻面の開閉で温度環境等を改善し、光合成促進により品質向上が図られたとの意見あり。その成果等を今後、専技の協力を得て現場に波及させたい。

□ 長田委員

図2「代謝経路（フラックス）分析結果」（縦軸、横軸）の意味は。

■ 生産流通部 溝口部長

○の大きさの違いが各代謝経路の寄与度の違いを表している。

「メタボロミクスを活用した良食味米の評価技術の開発」

□ 長田委員

タンパク含量、アミロース、アミロペクチン等のメジャーな物質に比べて寄与度は。

■ 生産流通部 溝口部長

タンパク質、アミロース、アミロペクチンとの相関は不明であるが、栽培への関連も検討していきたい。

「生産性向上に向けたピーマンのハイワイヤー栽培技術の確立」

□ 田村委員

1果重45g以上で収穫すれば確かに収量が上がるだろうが、可販果収量というのはA品B品という分析を行った上での結果か。

■ 野菜部 黒木部長

A品B品と分けけて分析した結果で、その比率は従来のものとほぼ変わらなかった。

従来1果重25～30gで収穫していたものを45g以上で収穫すると、可販果収量が2割程度高くなる事例と整理している。

「全般（終了課題の評価）」

□ 押川委員

A～C評価はどのように判断しているのか。

■ 山口副場長（研究担当）

成果目標の達成状況及び研究成果カードの発出状況から総合的に判断している。

「気候変動の影響評価と適応のための果樹栽培技術の確立」

□ 竹下委員

高温障害対策は非常に重要と考えるが、異常高温が続いた場合も対応できる試験研究の内容になっているか。

■ 果樹部 湯地部長

日焼け果防止、ナシの不発芽対策、かんきつの系統選抜（土壌選ばない日向夏）について、引き続き取り組んでいる。

□ 竹下委員

新しい品種が入ると、新たな病害も入ってくるので注意をお願いします。

(3) 令和7年度新規課題について

「水田土壌および畑地土壌の簡易土壌分析技術の開発」

□ 満平委員

水田土壌、畑地土壌の簡易分析は早く技術を確立して欲しいが開発予定はいつか。

■ 土壌環境部 野崎部長

現場では有機物主体の施肥体系により肥効が見えにくくなっているため、簡易土壌分析技術の開発は重要と考えており、本課題の実施期間である令和9年度までに完成させる予定である。

「高軒高養液栽培における高収量技術の開発」

□ 押川委員

資材高騰により、一般的なハウスですら建てられないが、高軒高ハウスの試験は必要か。経済連の高軒高ハウスをそのまま試験研究に活用することはできないか。

■ 野菜部 黒木部長

高軒高ハウスの現状については御指摘のとおりであるが、養液栽培の試験研究において、土耕栽培でも使える技術もたくさん出てきている。

野菜部が経済連の高軒ハウスをそのまま試験ほ場として運営するのは困難であるが、今も1週間に1回程度調査等を実施し、経済連担当者と一緒に取りまとめたデータを元に栽培方針を検討している。栽培データ分析等は引き続き協力したい。

「(要望) ブッキーニのイボ果発生原因の究明」

□ 押川委員

ブッキーニのイボ果発生原因の究明の状況は。

■ 生産流通部 溝口部長

営振協の依頼を受け、6月に着手しているが、過去の成績と合わない部分もあったので、引き続き、協力しながら課題解決に取り組んでいく。

「みやざき茶の更なる輸出拡大に繋がる栽培技術の開発」

□ 竹下委員

アルミニウムの基準は国内、海外どちらのものか。

■ 茶業支場 佐藤支場長

ヨーロッパの基準である。

□ 竹下委員

他の県では問題になっていないのか。

■ 茶業支場 佐藤支場長

鹿児島県の担当者に聴いたことがあるが、問題にはなっていない。

「水田土壌および畑地土壌の簡易土壌分析技術の開発」

□ 田村委員

簡易土壌分析を活用した分析結果やデータの読み方・活用法が重要と思うが考えは。

■ 土壌環境部 野崎部長

品目毎にマニュアル化することが重要と考える。人員不足ではあるが、優先順位を付けて取り組みたい。

「生産者と実需者の用途に対応したプラスアルファ水稻育種」

□ 田村委員

「ひなたみのり」は本年度480kgと自分の管理する中では成績が良かったし、2回刈りもできるのではと考える。また、ミナミユタカも優秀な品種。品種を多様化することも重要だが、用途を広げる検討も重要。

■ 作物部 荒砂部長

2回刈りは、飼料用米では制度的に難しく、他の用途であれば検討の可能性はある。

また、本県では、育成品種を専用品種として推進をしてきた経緯がある。育成する側としては用途広く使って欲しいが、行政と検討していきたい。

「(全般) 露地野菜における技術開発の方向性」

□ 満平委員

気候変動対策や省力化のための栽培技術確立を重視すべきと考えるがいかかが。

■ 畑作・園芸支場 八代支場長

今後、気候変動に対応した品種選定等の取組が重要と認識している。

また、省力化については、令和7年度新規課題「露地野菜における直播種き栽培技術の開発」において、キャベツとたまねぎの直播き栽培技術の開発を予定している。